



シェイクスピアⅣ

中野好夫
小野協一
平井正穂 訳
倉橋健
三神 勲

世界古典文学全集

44

筑摩書房

シェイクスピア IV

世界古典文学全集 第44巻

昭和42年5月15日第1刷発行
昭和42年7月15日第2刷発行

訳者代表 中 野 好 夫

発 行 者 竹 之 内 静 雄

発 行 所 株式 筑 摩 書 房
会社

東京都千代田区神田小川町2-8
振替東京 4123 電話 (291) 7651

目次

空騒ぎ

小野協一訳 5

尺には尺を

平井正穂訳 61

コリオレーナス

倉橋健訳 123

シンベリン

三神勲訳 201

ヘンリー四世 第一部

中野好夫訳 279

ヘンリー四世 第二部

中野好夫訳 347

解説

平井正穂 423

登場人物表

シェイクスピア
Ⅳ

空騒ぎ

登場人物

ドン・ペドロ アラゴンの領主。

ドン・ジョン その異腹の弟。

クローディオ フロレンスの若い貴族。

ベネディック バデューアの若い貴族。

レオナートー メシーナの知事。

アントーニオ その弟、老人。

バルサザー ドン・ペドロに仕える歌手。

ボラチオ

コンラッド

ドン・ジョンの従人。

使者

修道僧フランシス

ドグベリー 警保官。

ヴァージズ 村役人。

第一の夜番

第二の夜番

書記

侍童

貴族

ヒアロー レオナートーの娘。

ベアトリス レオナートーの姪。

マーガレット
アーシュラ } ヒアローの侍女。

アントーニオの息子、楽師、夜番、従者等。

場所

シシリ島のメシーナ。

第一幕

第一場 レオナートーの邸につづく果樹園。

片側に枝のこみ合った果樹におおわれた小径。

正面に忍冬^{オウゴン}におおわれた亭。

メシーナの知事レオナートー、その娘ヒアロー、姪ベアトリス、使者とともに登場。

レオナートー この手紙によると、アラゴンの領主ドン・ペドロが今宵このメシーナにお着きになるとのこと。

使者 もうすぐそこまで来ておられる頃です。私がお別れしてきたところからも、三リーグとはございませんでしたから。

レオナートー このたびの合戦での味方の損失は？

使者 身分を問わずほんのわずか、名あるお方はお一人も。

レオナートー 全員そろっての凱旋とは二重の勝利というものの。……これで見ると、ドン・ペドロはクロードイオとか申すフロレンスの若者に多分の恩賞を授けられたようだが。

使者 クロードイオ様にそれだけのお働きがあつたればこそ、ペドロ様にもお目をかけられたのでございます。その若さに似合わぬ立派なお振舞い、仔羊の姿もて獅子の勲^{いささ}を立てられたと申せましょう。まことに期待を上回るその奮戦ぶりは、私どもの口からでは御想像も及びますまい。

レオナートー たしかこのメシーナに叔父がいたはずだが、それを聞けばさぞ喜ぶことであらう。

使者 叔父上にはすでに手紙をお届けしてまいりましたが、ことのほかお喜びの御様子で——いえ、お喜びのあまり慎重にも失われかけましたのが、悲しみの印^{しるし}によってや々と救われましたような次第で。

レオナートー 涙を流したというのか？

使者 とめどもなく。

レオナートー 自然の情が溢れたのだ。情愛の涙に洗われた顔ほど真実なものはない。悲しみに笑うよりは、喜びに泣くほうが、どれほど幸せなことか！

ベアトリス あゝ、大法螺^{おほはら}様もお帰りになりまして？

使者 そのようなお名前の方は存じ上げませんが、お嬢様。どの部隊にもそんな方はいらっしゃいません。

レオナートー 誰のことを尋ねているのだ？

ヒアロー バデニアのベネディック様のことよ。

使者 ああ、あの方なら御帰還になりました——相変らずおにぎやかなことぞ。

ベアトリス いつかあの方は、メシーナの辻々に高札をかがけて、キュービッドに遠矢の試合を挑みましたのよ。ところが、それを読んだ伯父の家の道化が、キュービッドに代つて矢面に立ち、半弓で勝負を買って出たつてわけ。それで、今度の軍ではあの方は何人殺して食べましたの？ いえ、何人仕止めましたの？ だって、仕止めた分は残らず食べてみせるつて、私約束しましたの。

レオナートー これこれ、そんなにベネディック様に当り散らすものではない——もっとも、あの方ならまず間違いなくお前とも太刀打ちできようが。

使者 このたびの戦いでも、お嬢様、めざましいお働きをなしました。ベアトリス つまり食糧が腐りかけていたのを、あの人がもりもり平らげたつてわけね。なにぶん勇猛果敢な大食漢、みことな太つ腹の持主ですもの。

使者 それに立派な剣士でもございます。

ベアトリス そう、婦人に対しては立派な剣士、でも殿方に対してはどうでしょう？

使者 殿方に対しては殿方らしく、男に対しては男らしく——全身これ美徳のかたまりでございます。

ベアトリス それはそうね。たしかに凝り固まっただけの人間ですわ、でも何のかたまりかとなると——よしませう、どうせ誰しも同じようなものなのだから。

レオナート 姪のことを誤解なさらぬよう。ベネディック様とこれとの間は、いつも陽気な戦争とでもいうか、会えばきまって頓智合戦になるのだ。

ベアトリス お気の毒なことに、負けるのはきまってあちらのほう。この前の手合せでも、五つの才覚のうち四つまでが、跛をひきひき退散して、残った一つで五体をまかなっているような始末——そうなったからには、せめて体を冷やさないだけの才覚でもおありなら、馬や鹿とはちがうのだという証拠に、それを紋所に貼りつけておくことだわ。だってそうでもしないと、あの方も理性をもった動物だということだわ。誰にも分らなくりますもの。あの方、この頃は誰とつき合っているの？ なしろ、毎月のように盟友の契りを結ぶのだから。

使者 まさか、そのようなことが？

ベアトリス 大ありなの。あの人の実とときは、帽子の流行よろしく、猫の目のように変わりますのよ。

使者 どうやら、お嬢様、あの方の名前は、お嬢様の御最良の名簿には載っておりませぬよう。

ベアトリス もちろん、もし載っていようものなら、名簿を残らず焼いてしましますわ。それにしても、あの方は誰とつき合っていますの？

あの人となら地獄の底までもという、そんな若い暴れん坊はおられますの？

使者 いちばん親しくしておりますのは、クロードイオ様という立派な家柄のお方です。

ベアトリス まあ、お気の毒に、そのかた厄病神にとりつかれたようなものだわ——あの人とときは、疫病よりもすばやく乗りうつり、うつされたほうはたちまち気が狂ってしまうのだから。神様、どうかクロードイオ様をお助けくださいませ。もうベネディック病にかかってしまわれたのなら、癒るまでには千ポンドはかかりますわ。

使者 お嬢様、あなたとはうっかり仲違いできませんね。

ベアトリス そうですとも。

レオナート おまえだけは気の狂う心配はないようだな。

ベアトリス ええ、お正月に暑気あたりでもしないかぎり。使者 ベドロ様がお着きになりました。

ドン・ベドロ、クロードイオ、ベネディック、バルサザー、およびドン・ベドロの異腹の弟ジョン登場。

ドン・ベドロ これはこれは、レオナート殿、わざわざ厄介者をお出迎えとは。出費をのがれようとするのが世間のならい、それをあなたは進んで引き受けようとなさる。

レオナート いや、いまだかつて、そのようなお姿の厄介者がわが家に舞いこんだことはございませぬ。厄介払いをしたあとには、楽しみが残るはずですよ。ところが、あなた様がお発ちになると、幸せも別れを告げて、残るのは悲しみばかりでございます。

ドン・ベドロ 荷物をよろこんで背負いこまれるとは。……こちらはお嬢御ですな？

レオナート この母親がたびたびそう申しております。

ベネディック 疑っておられたのですな、そう聞いただしたところをみると？

レオナート どういたしまして、ベネディック殿——なにぶん、当時はあなたもまだ子供でしたからな。

ドン・ベドロ みごと一本取られたな、ベネディック——これでおよそ見当がつくというものだ、一人前になった今のお前の行状が。たしか

に娘御は父上に生き写しだ。御安心なさい、お嬢さん、立派なお父上によく似ておられるから。

「ヒアロー、レオナートーとかたわらで話しこむ」

ベネディック いかにあの娘が父親似だといつても、親父の首とすげかえる気にはならないだろうな、たとえメシーナの町をそっくりやると言われても。

ベアトリス いつまでしゃべっているつもりですの、ベネディックさん——誰も聞いてはいませんよ。

ベネディック これは、これは、おなつかしき高慢姫！ まだ生きていらっしやったので？

ベアトリス 高慢が死ねまして、ベネディックさんのようなお誂えむきの餌がころがっているというのに？ あなたのお顔を見れば、どんな貞淑さだつて高慢に変わりますわ。

ベネディック となると、貞淑というのは浮気なものですな。もつとも、私がすべての御婦人方に好かれていることは確かです、ただしあなただけは別ですがね。それだけに、つくづく思いますよ、わが胸にせめて一片の好き心でもあれば、とね。正直な話、私は何としても女性が好きになれないのです。

ベアトリス 女性にとってはもつつけの幸い——さもないと、誰かれかまわすしつくく口説かれて困ったことでしょうからね。神様の御加護か、生れついでに冷血なのか、その点では私もあなたと同じ気質なの。殿方の愛の誓いなど聞くよりは、うちの犬が鵲に吠えるのを聞いているほうが楽しいのだから。

ベネディック 姫のそのお心がいつまでも変わらせぬように、そうすれば将来どこかの男が一人、顔に生傷を作られなくてすむでしょうからね。

ベアトリス 生傷くらいでいまだ顔がまぶくなるわけでもないでしょう、もしそれがあなたのような顔だったら。

ベネディック なるほど、あなたは鸚鵡カカロの学校の先生にはうってつけだ。

ベアトリス 私の口真似をする鳥のほうが、あなたの真似をする獣よりはましでございましょう。

ベネディック 私の馬があなたの舌くらい脚が速ければ、それにその息の長さにもあやからせたいものだ。でも、どうぞ先をお続けなさい——こちらはもうたくさんだ。

ベアトリス あなたはいいつも性のわるい馬と同じ、急に立ち止って人をおつぼり出すのだから。昔からよくわかっていますわ。

ドン・ペドロ つまりそういつた次第だ、レオナートー。「と言いながら、こちらを向く」クローディオオもベネディックも、レオナートー殿がわれわれをみんな招待してくださった。すくなくもひと月は滞在するつもりだと申し上げたのだが、何かの都合でわれわれの逗留がもつと長びけばよいとの温かい御返事だ。誓つてもよい、それはけつして口先だけの巧言ではなく、心からそう望んでおられるのだ。

レオナートー その点なら、いくらお誓いになつても偽誓になる心配はございません。「ドン・ジョンに」あなた様もようこそいらっしやいました——お兄上とも仲直りされました由。「お辞儀をしながら」何なりとお申しつけください。

ドン・ジョン ありがとう。私は口数の多い男ではないが、感謝はしている。

レオナートー それでは内へお運びいただきましょうか？
ドン・ペドロ 手をかしてくれ、レオナートー。いっしょにまいろう。

「ベネディックとクローディオを除いて全員退場」
クローディオ ベネディック、レオナートーの娘に目をとめたか？

ベネディック 目をとめはしないが、見てはいた。

クローディオ なかなかしとやかな娘ではないか？

ベネディック いったい君は本心から、おれの率直・正直な判断を求めているのかい？ それとも、女性に対する暴君で通っている、おれ流の感想を聞きたいのかい？

クローディオ いや、まじめな意見が聞きたいのだ。

ベネディック それなら、正直なところ、あの娘は背が低すぎて高くは買えないし、色白だといえど白々しいし、大袈裟にほめるには小柄すぎる——しいて讃辞を呈するとすれば、今のままの彼女でなくなれば、美人ではなくなるだろうし、今のままの彼女でしかないから、おれには好きになれない、というところだ。

クローディオ 冗談だと思っているのだな。頼むから、あの娘をどう思うか、本当のところを聞かしてくれ。

ベネディック あの娘を買うつもりかい、そんなに聞きたがるというのは？

クローディオ この世の富であれほどの宝石が買えると思うのか？

ベネディック 買えるとも、しまつておく箱までつけてね。それにしても、君は額に皺をよせて本気でそんなことを言っているのか？ それとともに天邪鬼のからかい半分に、キューピッドは目のいい勢子で、その矢を作るヴァルカンは腕のいい大工だともいうのかい？ さあ、君の歌に合せるには、どんな調子にすればいいのかね？

クローディオ おれの目からすると、あんな美人はかつて見たこともない。

ベネディック おれはまだ眼鏡がなくてもこと足りるが、それらしいものは見当らないね。それよりも、あの娘の従姉がいたらう、あれで兎暴性さえ発揮しなければ、このほうがずっと美人さ、五月の朔日が十二月の晦日よりまさっているようにね。でも、君はまさか女房持ちになろうというのではないだろうね？

クローディオ 自信がもてなくなってきたのだ、結婚はしないと誓ったおれだが、もしヒアローが妻にできるとなると。

ベネディック そこまで進んでいるのか？ まったく、広い世間に一人くらいはいないものかね、角を隠すためでなしに帽子をかぶる男が？ 齢六十の独身男というのは二度とお目にかかれないのかね？ 勝手にするがいさ、どうしても自分から靴に頭をつっこんで、頭にたこをこしらえ、休日だというのに家にひっこもって、溜息ついて暮した

いというのなら。

ドン・ペドロが戻ってくる。

みる、殿が君を捜しに戻られたぞ。

ドン・ペドロ どんな内密の話があったのだ？ どうしてレオナートーの家へいつしよに来なかったのだ？

ベネディック ぜひとも話せとお命じくされれば。

ドン・ペドロ 主君の名において命令する。

ベネディック 聞いたらう、クローディオ伯。おれは哑のように黙っていることだつてできるのだ、それは君も認めてくれるだろう——しかし、主君の御命令、いいか、主君の御命令とあれば！ この男は恋をしているのでございます——相手は？ とお尋ねになるのは殿のおせりふ。よろしゅうございますか、その答えはいたつて手短か——ヒアロー、すなわちレオナートーの背の短い娘にございます。

クローディオ いずれこの男にかかつては、こんなふうにはらされるのが関の山。

ベネディック 昔話にいうとおりでございます——「そんなことつてなかったし、そんなことつて今もない、どうぞ神様、行く末も、そんなことのあるまねよう。」

クローディオ この情熱がすぐにさめるようなものでなければ、どうぞ神様、行く末は、そんなことのありますように。

ドン・ペドロ アーメン、もしその愛が真実のものならば——あの娘ならどここいつて申し分ない。

クローディオ 殿、そんなことをおっしゃって、私を異にかけようというおつもりでしょう。

ドン・ペドロ 真実にかけて、思ったままを申ししているのだ。

クローディオ それなら忠誠にかけて、私も思ったままを申し上げたの

(1) 女房に浮気された男の額には角が生えたと云われた。

です。

ベネディック それなら真実と忠誠の両方にかけて、私も思ったままを申し上げたまでのこと。

クロードイオ 私は感じています。あの娘を愛していることを。

ドン・ペドロ 私は知っている、あの娘が申し分ないことを。

ベネディック 私はあの娘を愛らしいとも感じませんし、申し分ないことも知りません、それが火といえども溶かしえない私の意見です——たとえ火あぶりにされても、それだけは譲れません。

ドン・ペドロ いつだつてお前は美に反抗する異端者だったからな。

クロードイオ そして意地でその立場を通してきたのでございます。

ベネディック たしかに私も女から生れた、その点は女に感謝している。育ててくれたのもたしかに女だ、その点も同様心から感謝している。しかし、女のために顔に角を生やされ、その角笛を吹き鳴らしたり、知らぬが仏でそれを帯にぶらさげて歩く、そればかりは御免こうむりたい。女性を疑うというような非礼は犯したくない、だからこそいっさいの女性を信用せず、おかげで過ちを犯さずにすんでいるのです。けつぎよく——そのほうが景氣よくいくでしょうから——生涯独身で通すつもりです。

ドン・ペドロ いずれこの目の黒いうちに、恋に蒼ざめたお前の顔を見ることになるだろうよ。

ベネディック 殿、怒りか、病か、飢えのためならいざ知らず——恋のために蒼ざめることだけは、断じてございせん。万一私が、酒でとりかえぬほどの血を、恋の溜息で失うようなことがございしましたら、小唄作者のペン先でこの目をえぐり出し、盲のキュービッドの看板代りに、女郎屋の戸口に吊していただきましよう。

ドン・ペドロ だが、もしその誓いを破るようなことになれば、とんだ物笑いの種になるぞ。

ベネディック そんなことになりましたら、猫のように柳籠に詰めて、弓矢の的にしてくださつても結構です、うまく命中したものがいまし

たら、肩を叩いてアダムの再来と称えていただきましよう。

ドン・ペドロ うん、いずれ時がくれば分ることだ——「時ふれば猛き牡牛も軛に耐える」というからな。

ベネディック 猛き牡牛はそうかもしれません——しかし分別あるベネディックが、軛に耐えるようなことになりましたら、牡牛の角をもぎとつて、この額に植えつけてもらいましよう。それから私の絵姿をみつともなく描いて、「よき貸馬あり」の貼り札よろしく大きな字で、「これぞ女房持ちのベネディック」と、私の絵看板の下に書き出していただきましよう。

クロードイオ 万一そんなことになれば、きつと角を振り立てて荒れ狂うことだろうよ。

ドン・ペドロ いや、キュービッドが歓楽の都ヴェニスでその矢を使い、はたしてさえないなければ、遠からずそんな羽目に陥つて、がたがた震えだすにきまつている。

ベネディック そんなことになれば、きつと大地まで震えだすことございましよう。

ドン・ペドロ いや、どうせお前のことだ、なんとか時間と折合いをつけて、せいぜい延期してもらふことだろうが。それはさておき、ベネディック、レオナートのところへいつて、よろしく申し上げるとともに、晚餐にはかならず参上すると伝えてくれ——なにしろたいそうな準備をしているようだから。

ベネディック さようなお使いなら、ほぼ十分な才覚をそなえているつもり、されば御身にはくれぐれも——

クロードイオ 神のお導きのあらんことを。茅屋にて記す、と申したきところなれど、あいにくと家はこれなく。

ドン・ペドロ 七月六日、ベネディック 拜。

ベネディック おい、クロードイオ、人をからかうのいいかげんにしろ。君の話にはとかく言葉の綾が多すぎる、しかもその綾たるや、糸目がはつれてあやしいものだ。そんなきまり文句の端布を並べて人を

からかうつもりなら、その前に自分の胸にきいてみるがよい——と、まずはこれにて失礼。

〔退場〕

クロードイオ 殿、この上は殿にお力添えを願ひとう存じます。

ドン・ペドロ 私の心はお前のもの、何なりと申しつけるがよい。どうすればよいかをさえ教えてやれば、それは喜んで学ぶはずだ、どんな難題であらうと、お前のためになることなら。

クロードイオ レオナートーには息子はございましてらうか？

ドン・ペドロ 子供はヒアローだけ、たった一人の跡とり娘だ。あれに惚れたと申すのか、クロードイオ？

クロードイオ

はい、殿、

このたびの戦に出陣のみぎり、はじめてあの娘を見初めました、そのときはいわば武人の目、好ましくは思いながらも、荒々しい仕事をひかえていただけに、その好ましさ、恋という名に駆り立てるまでのゆとりは更にございませんでした。

しかしこうして凱旋して、戦にかけた心の思いが胸の中より去りますと、席の空くのを待ちかねて、

優にやさしき好き心が、どつとばかりに群がり寄せ、

あのヒアローの何と美しいことか、そもそも出陣の前から憎からず思っていたはずだなどと、口々に唆すのでございます。

ドン・ペドロ その分では、すぐにいっばしの恋人気取り、

惚気まじりの長談義で、聞き手の耳をうんざりさせよう。

それほどヒアローを愛しているのなら、その気持を大事にするがよい、当人には私から話してやろう、それから父親にも、

必ず娘はお前のものになる。もともとそれが狙いだったのであらう、いやに体裁のいい話を持ってまわって切り出したのも？

クロードイオ 何とやさしいお心づかい、顔色から

恋の嘆きを読みとられて、その仲介をしてくださるとは！

あんな長談義をいたしましたのも、いかにも軽率にすぎると思われるのを恐れて、先手を打ったつもりでございます。

ドン・ペドロ 橋の長さは、川の幅だけあれば事足りる。

急場の用になつてこそ、施しにも値打があるというものの、役に立つことがまず肝心だ。何といおうと、お前は恋をしている、それなら私が、特効薬を授けてやろう。

さいわい今夜は、宴会がある——

なんとか仮装して、お前になりすまし、

ヒアローをつかまえて、クロードイオと名乗る、

それから想いのたけを、あの娘の胸に打ちあげ、

押しの一手で、あの娘の耳を虜にし、

恋の口舌で、攻め立て攻め立て、

そのあと父親に、話を持ちかける——

と、まずはこういう寸法で、あの娘はお前のものになる。そうと決まれば、さつそく実行にとりかかろう。

〔兩人退場〕

第二場 レオナートー家の玄関広間。

戸口三つ。一つは中央にあつて大広間に通じる。その上に廻廊があり、そこにも奥に通じる戸口が二つついている。アントーニオが召使を指図して舞踏会の準備をしている。

レオナートー、急ぎ登場。

レオナートー どうした、アントーニオ、甥はどこだ、つまりお前さんの息子は？ 音楽の手はずはつけてくれたらうな？

アントーニオ それで走り回っているところです。それよりも、兄さん、おかしな話を耳にした、夢にも考えられないようなことだ。

(1) 有名な弓の名手、アダム・ベルを指すものとされている。

(2) 旧暦の夏至にあたり、暑氣狂いにはふさわしい日。

レオナートー いい話か？

アントーニオ それは結果次第、ただし表紙はよくできています。つまり表向きはしごく結構な話です。殿とクロードイ伯とが果樹園の下徑を歩きながら話しておられたことを、うちの下男の一人がすっかり立ち聞きしてしまったのです。殿がクロードイ様に漏らされたところは、殿には私の姪、つまりあなたの娘にいたく御執心で、そのことを今夜の舞踏会ではつきりさせるおつもりとか——それでもし娘のほうに異存がなければ、この機を逸せず、すぐにも兄さんに話を持ちこむおつもりだそうです。

レオナートー それをお前に話したのは、すこしは分別のある男か？
アントーニオ なかなか気のきいた男で。今呼びにやりますから、じかに訊いてみてください。

レオナートー いや、いや、それが事実となるまでは、夢ということにしておこう。ただ娘には知らせておかねばなるまい、万一事実となつたときに、返事に窮するようでも困るから。お前、いつて娘に話してきてくれぬか。

〔アントーニオ退場、その息子、楽師を一人つれて別の戸口から入ってくる〕

甥か、自分の役目は心得ているだろうな——〔楽師を見て〕おや、すまぬ、すまぬ、いっしょに来てくれぬか、お前さんの腕を借りねばならぬ。〔甥に〕忙しいときだ、ぬかりなくやつてくれ。

〔楽師をつれて去る。すこし間をおいて、アントーニオの息子と召使たちも退場〕

第三場 前場に同じ。

廻廊の戸が一つ開き、ドン・ジョンとコンラッドが出てくる。

コンラッド これはまた何となくしました！ その度はずれたお悩みは、

いかがな訳でございましょう？

ドン・ジョン その訳のほうに止め度がないからこそ、悩みのほうにも限りがないのだ。

コンラッド 理性の声を聞かねばなりません。

ドン・ジョン で、それを聞いたとして、何の御利益があるのだ？
コンラッド すぐには効き目がないまでも、とにかく我慢する気にはなれましょう。

ドン・ジョン これは異なことを聞く——もともとお前は土星の下に生れた陰気性だったはずではないか——そのお前が、瀕死の重病人にお説教の丸薬を飲ませようというのか？ おれは本心をかくせない男だ。悩むわけがあれば悩み、人の冗談を聞いても笑わない。食いたくなれば食うまで、人の都合など待つてはおれない。睡くなれば睡り、他人の用などかまひはしない。おかしければ笑い、人の御機嫌などとり結びはしない。

コンラッド それもごもつとも、ですが、あまり大っぴらになさるのは感心しません、誰はばかりことなく振舞えるようになれば別ですが。先頃も兄上にさからわれて、このほどようやく御勘気が解けたとはいえ、まだまだほんとに根づいたとは申せません、そのためにはせいぜい陽気をよくするように努められることです。御自分の收穫期は御自分で作り出すだけの覚悟がいらしましょう。

ドン・ジョン 兄の恵みをうけて花を咲かせるよりは、垣根の野薔薇でいたほうがずっとましだ。手の上げ下ろしにまで気がつかつて、人の寵を得るよりは、いっそみんなに蔑まれていたほうが、おれの性に合っている。その点、おれはおべっか使いの善人とはいえないまでも、正々堂々の悪党であることは間違いない。今のおれは、口輪をはめられた上での信任、足枷をつけられての解放だ——だから、おれは籠の中では歌わないことにきめた。口輪がとれば嚙みつきもしよう、足枷がはずされれば好きなように振舞おう。が、それまでは、今のままにしておいてくれ、おれを変えようなどと望むな。

コンラッド それ、それ、その御不満をなんとか利用できませぬものか？

ドン・ジョン 大いに利用しているさ、おれにはほかに利用するものではないのだから。誰だ、そこへ来たのは？

ボラチオ 廻廊にはいつてくる。

どうした、ボラチオ？

ボラチオ あちらの晩餐の席を抜けてきたところです。お兄上にはレオナートーの盛大なもてなしにすっかり御満悦の模様で。それより、ぜひお耳に入れておきたいのは、縁談が一つもち上っていることです。

ドン・ジョン そいつは悪事の種になりそうなことか？ どこの間抜けだ、気の休まる暇もない暮しに身をゆだねようというのは？

ボラチオ それがなんと、お兄上の右腕ともいうべきお方で。

ドン・ジョン なに、あのしやれ者のクロードイオか？

ボラチオ まさしく。

ドン・ジョン 見上げた士だ！ で、誰だ、相手は？ あいつの目はどつちの方角を向いているのだ？

ボラチオ なんとそれが、レオナートーの跡とり娘のヒアローでございます。

ドン・ジョン おませなひよっこめ！ お前、どうしてそれを知った？
ボラチオ たまたま香を焚く係りをおおせつかり、かび臭い部屋をくすべておりました、ところへ、殿とクロードイオ様がはいって来られました、手に手を組んで、何やら真剣に話しこんでおられる御様子。こちらは急いで壁掛けのうしろに身をかくし、残らず聞きとりましたところでは、殿がまずあの娘を口説かれて、御自分のものになさる、それから改めてクロードイオ伯にお下げ渡しになる、とまずはこのようにことに決まりましたよう。

ドン・ジョン さあ、さあ、向うへいこう——こいつはとんだ憂さ晴しの種になるかもしれぬぞ。あの成上り者の若僧め、まんまとおれを蹴

落して、あらゆる榮譽をひとり占めにしやがった。やつを明かしてやれば、こちらの胸も明るくなるのだ。二人とも、大丈夫だろうな、力になってくれるだろうな？

コンラッド はい、命を賭けても。

ドン・ジョン 晩餐の席へおしかけよう——おれが減入^{ぐい}っていればいるほど、やつらはいよいよ陽気になるのだ。料理番がおれと肚^{はら}を合せてくれれば、しめたものののだが。さて、どんなことになるか、とにかくやってみよう。

ボラチオ お供いたします。

〔一同、廻廊から退場〕

第二幕

第一場 レオナートー家の玄関広間。

大広間の戸が開き、レオナートー、アントーニオ、ヒアロー、ベアトリス、マーガレット、アーシユラ、その他レオナートー家のものが出てくる。

レオナートー ジョン伯は晩餐には来られなかったのか？

アントーニオ お見かけしなかったな。

ベアトリス あの方って、なんて仏頂面をしていらつしやるんでしよう。いつお会いしても、そのあと一時間も胸やけがとまらないわ。

ヒアローほんとに陰気なお方ね。

ベアトリス あの方とベネディックさんと足して二で割ると、すばらしい人になるのだけど。片方は木偶のようにまるで口をきかないし、片方は甘えん坊のようにしよっちゅうしやべりどおしだし。

レオナートー それならジョン伯の口にベネディック殿の舌を半分、ベネディック殿の顔にジョン伯の陰気さを半分——

ベアトリス ついでに立派な脛と立派な足、おまけに財布にはお金がぎくぎく、そんな方がいれば世界じゅうのどんな女だってわがものにできるでしょうよ、女のほうに好意さえあれば。

レオナートー あきれたやつだ、そう口がわるくては、生涯亭主がみつからぬぞ。

アントーニオ まったく、ちと激しすぎる。

ベアトリス 激しすぎるというのは、激しいのを通り越すわけでしょう。

となると、私は神様が贈物をなさる手間をばういてあげることになるわ、だって言うじゃございません、「神様は激しい牝牛には短い角をくださる」って——でも、激しすぎる牝牛には何もくださらないでしょうから。

レオナートー つまり、お前は激しすぎるから、神様もお前には角をくださらぬってわけか？

ベアトリス ええ、角を生やすような夫さえ授けてくださなければ——私にとってはそれこそ幸せ、毎朝毎晩ひざまずいて、そうお祈りしていますの。おお、いやだ！ 髻を生やした亭主なんてまっぴら——いっそ毛布を抱いて寝たほうがましだわ。

レオナートー 髻のない亭主がみつかるかしれんぞ。

ベアトリス そんな亭主はどうしましよう？ 私の着物をきせて小間使いにでもしましうかしら？ 髻の生えた男では若いとはいえないし、髻のない男では一人前とはいえない。若くない男では私に向かないし、一人前でなければ私のほうが向かない。ですから、今のうちに見世物小屋の親方から手付金をとっておいて、死んだらその猿を地獄へ連れていってやるつもり、だって、嫁にゆきそになった女は子供を天国へ案内できないって言うから。

レオナートー とすると、お前は地獄へゆくわけだな？

ベアトリス どういたしまして——ほんの入口まで。寝取られ亭主のように角を生やした悪魔が、そこで私を出迎えて、「天国へゆけ、ベアトリス、天国へゆけ——ここはお前たち生娘のくる所ではない。」そこで猿だけ引き渡しておいて、私はペテロ様のいらつしやる天国へ。ペテロ様はきつと独身者ばかりいるところを教えてくださるから、そこで私たちは日がな一日、たのしく遊んで暮します。

アントーニオ 「ヒアローに」ヒアロー、あんたは父親のことを聞くだらうな。

ベアトリス もちろんですわ、丁寧にお辞儀をして、「はい、お父様さえよろしければ」と言うのがこの人の務めですもの。でも、ヒアロー